

# 数学って、実は熱くて自由!!

## 問題を解く喜び 漫画や小説に

難解、地味、頭張っても理解不能。そんな数学の印象を吹き飛ばし、距離をグッと縮めてくれる漫画や小説が生まれている。漫画「数学ゴールデン」(白泉社)を描く元数学教師の漫画家蔵丸竜彦さん、小説「無限の中心」(講談社)の児童文学作家まはら三穂さんに、創作の意図や魅力を聞くと、数学が「熱く、自由な学問」であることが浮かび上がった。

「数学ゴールデン」は漫画誌「ヤングアニマルZERO」で連載中。国際数学オリンピックの日本代表を目指す高校生たちの青春を描く。蔵丸さんは「公式を暗記して解く」というイメージを崩したい。苦手な人こそ読んでほしい」と語る。

福岡を舞台に、数学に夢中な主人公の春一が仲間と出会い、難問に挑む。受験に失敗し、劣等感を抱く春一は、決して天才型ではない。生き生きとした人物描写も楽しい。



ファンレターを手にする蔵丸竜彦さん。問題が解けそうと思えた瞬間の「ほどける快感」が伝わるように描きたい



「数学ゴールデン」1巻の表紙



「無限の中心」の表紙

## 「数学ゴールデン」公式暗記のイメージ崩す

問題を解くシーンは、スポーツ漫画のように熱く、勢いがある。「数行の設問から、ふわっと自分の記憶や感覚が立ち上がる。頭の中でドラマチックな世界が展開していく面白さを伝えたい。数学って、実は熱い」

九州大の数学科を卒業し、地元鹿児島の高校で3年間教えた。自作のテスト問題を生徒が解く楽しさや、解かれた嬉しい経験が、格闘技に似た描写につながったと笑う。

数学は好き嫌いが分かれる教科だ。学研教育総合研究所の「高校生白書」(2018年調査)などによると、小中高生生の好きな教科1位は算数と数学。嫌いな教科1位も算数と数学だが、中学生になると「嫌い」の割合が「好き」を上回る。

「抽象度が年々上がるから『これから先は分からない』と諦めがち」と蔵丸さん。だが暗記中心の教科と違い、知っていることを組み合わせれば解答に近づける。設問の前で、皆が同じスタートラインに立てる可

「数学ゴールデン」の一場面。「鳩ノ巣の原理」を戦隊ヒーローを用いて解説する(©蔵丸竜彦/白泉社)



## 「無限の中心」解答への道筋一つじゃない

能力が高い教科が数学です」

一方、数学が大の苦手だった作家まはらさんが手掛けた「無限の中心」では、数学との距離を少しでも詰めたという自身の思いから生まれた青春小説だ。数学研究部を巡る事件を、数学嫌いな女子高生とわの視点から描く。とわが「マイナス・マインナスがしょうしてプラスになるのか」と嘆く姿に、自らを投影した。まはらさんは「ネガティブな好奇心」から、あえて数学者の岡潔の随筆などを好んで読んできたという。本作で数学と向き合おうと決心し、数学オリンピックや大学の取材、問題集の勉強など準備に2年以上を費やした。

「一見決まり事だらけだけれど、実は自由な学問。ギャップが魅力」。解答への道筋は、山登りのように多様なルートから選べると知った。執筆後も「近づけた気はしない」と謙遜するが、苦手な人には「やみくもに怖がることはない」とアドバイスする。「数学は間口が広く奥が深い。安心して飛び込んでください」

「一見決まり事だらけだけれど、実は自由な学問。ギャップが魅力」。解答への道筋は、山登りのように多様なルートから選べると知った。執筆後も「近づけた気はしない」と謙遜するが、苦手な人には「やみくもに怖がることはない」とアドバイスする。「数学は間口が広く奥が深い。安心して飛び込んでください」

## 難解な概念、ユニークに解説

続々と登場する数学漫画や小説。難解な概念などを多彩な手法で伝えている。漫画「数学ゴールデン」では、証明に役立つ「鳩ノ巣の原理」を5人組の戦隊ヒーローに例えた。作者の蔵丸竜彦さんは「発想を工夫して、少しでも読者の記憶に残せたら」と話す。

「数学を描くフィクションは、世界の切り取り方が皆違う」と面白がる蔵丸さん。お薦めは結城浩さんの小説「数学ガール」(SBクリエイティブ)。漫画化もされて

いる大人気シリーズで「対話によって解けていく感じがいい」という。

近年注目を集める数学漫画の描き方もさまざま。網田村子さんの「数学であそぼ。」(小学館)は、暗記力だけで数学を乗り切ってきた主人公が、名門大学に入って初めて数学とまともに向き合うコメディだ。難しい概念もコミカルな物語の中で解説されており、理解しやすい。

天才少年の成長を描く三原和人さんの「はじめアルゴリズム」(講談社)では、数で表される世界的美しさをのぞき見ることができる。

## 切り取り方さまざま

12月13日分  
神戸新聞

あなた方が達成できなかった、あなた方が出会えなかった気持ちに、将来親となったときに我が子には味あわせてやってほしいと思います。  
「一つじゃない道筋」でない道を辿ったら、私の時代は「この解答はカス」呼ばわりされたことも、今は大切な思い出の一つです。